

坂の上の雲

司馬遼太郎

文 春 文 庫

坂 の 上 の 雲
(一)

司 馬 遼 太 郎



文 藝 春 秋



文春文庫

105-28

坂の上の雲(一)

定価 360円

1978年1月25日 第1刷

1979年9月1日 第6刷

著者 司馬遼太郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 〒102

TEL 03・265・1211

落丁・乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

坂 の 上 の 雲
(一)

司 馬 遼 太 郎



文 藝 春 秋

目次	
春や昔	7
真之	75
騎兵	129
七変人	159
海軍兵学校	202
馬	251
ほととぎす	280
軍艦	323

坂の上の雲
一

春や昔

まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。

その列島のなかの一つの島が四国であり、四国は、讃岐、阿波、土佐、伊予にわかれている。
伊予の首邑は松山。

城は、松山城という。城下の人口は土族をふくめて三万。その市街の中央に釜を伏せたような丘があり、丘は赤松でおおわれ、その赤松の樹間がくれに高さ十丈の石垣が天にのび、さらに瀬戸内の天を背景に三層の天守閣がすわっている。古来、この城は四国最大の城とされたが、あたりの風景が優美なために、石垣も櫓も、そのように厳くはみえない。

この物語の主人公は、あるいはこの時代の小さな日本ということになるかもしれないが、ともかくもわれわれは三人の人物のあとを追わねばならない。そのうちのひとりには、俳人になった。

俳句、短歌といった日本のふるい短詩型に新風を入れてその中興の祖になった正岡子規である。子規は明治二十八年、この故郷の町に帰り、

春や昔十五万石の城下かな

という句をつくった。多少あでやかすぎるところが難かもしれないが、子規は、そのあとからつづいた石川啄木たくぼくのように、その故郷に対し複雑な屈折をもたず、伊予松山の人情や風景のびやかさをのびやかなままにうたいあげている点、東北と南海道の伊予との風土の違いといえるかもしれない。

「信さん」

といわれた秋山信三郎よしふる好古は、この町のお徒士かちの子にうまれた。お徒士は足軽より一階級上だが、上士とは言えない。秋山家は代々十石そこそこを家禄として殿様から頂戴している。信さんは安政六年うまれうまれの七カ月児だが、成人して大男になったところをみれば、早生児というのはその後の成長にはさしかえのないものかもしれない。

信さんが十歳になった年の春、藩も秋山家もひっくりかえってしまふという事態がおこった。明治維新である。

「土佐の兵隊が町にくる」

ということ、藩も藩士も町人もおびえきった。この藩の殿様は、久松家ひさまつけである。徳川家康の

異父弟がその家祖になっており、三百諸侯のなかでは格別な待遇をうけた。幕末、長州征伐では幕府の命をうけて海を渡り、長州領内で戦った。要するにこの時勢での区分けでは、佐幕藩であった。

おなじ四国でも、土佐は官軍である。土佐藩は、松山藩を占領すべく北上したが、その人数はわずか二百人たらずであった。

「朝廷に降伏せよ。十五万両の償金^{つぐないきん}を朝廷にさしだせ」

と、土佐人の若い隊長が要求し、このため藩はさわざになり、結局はそれに従うことになった。城も市街も領土も、一時は土佐藩が保護領としてあずかるかたちになった。城下の役所、寺などには、

「土州^{げじん}下陣」

というはり紙が出された。信さんは十歳の子供ながら、この光景が終生忘れられぬものになった。

「あれを思うと、こんにちでも腹が立つ」

と、かれは後年、フランスから故郷に出した手紙のなかで洩^もらしている。

伊予松山というのは領内の地味が肥え、物実^{ものな}りがよく、気候は温暖で、しかも郊外には道後^{どうご}の温泉があり、すべてが駘蕩^{たいとう}としているから、自然、ひとに戦闘心が薄い。

この藩は、長州征伐でも負けた。負けてくやしがるよりも、謡^{うた}がはやった。

長州征伐マの字にケの字
猫に紙袋で、後に這う

士族の子までうたった。

敗けといえ、鳥羽伏見でも負けた。藩士は海を渡って逃げて帰った。さんざんに負けた上に城も領内も土佐藩に保管された。

「当分土州預地」

という高札が、城にも城下の四つ角にも立てられた。

もつとも土佐人がこの松山で乱暴を働いたという事実はなかった。土佐の隊長は小笠原唯八と言ひ、淡泊で知られた男で、進駐した士卒を厳重に統率し、松山藩士の感情を傷つけぬようにつとめた。

むしろ松山藩は、この小笠原唯八のためにすくわれた。なぜならば官軍の一派である長州人が海を渡って松山の海港である三津浜に上陸した。

「先年の長州征伐のうらみを報じてやる」

と、長州人は最初から復讐に燃えてやってきたのだが、小笠原唯八がそれをなだめ、かれらを入れず、ふたたび海へ退去させた。そのとき長州人は松山藩がもっていた最大の財産である汽船を奪った。

松山藩がこまりぬいたのはそういう屈辱よりも、経済問題であった。賠償金十五万両というのは、この藩の財政からみればほとんど不可能な数字であった。

この支払いのために、藩財政は底をつき、藩士の生活は困窮をきわめた。十石取りのお徒士の家である秋山家などはとりわけ悲惨であった。

すでに四人の子がある。この養育だけでも大変であるのに、この「土州進駐」の明治元年（慶応四年）三月にまた男児がうまれた。

「いっそ、おろしてしまおうか」

と、その懐妊中、当主の平五郎が妻お貞にいった。町家や百姓家では、間引という習慣がある。産婆にさえたのんでおけば、産湯をつかわせているときに溺死させてしまふのである。が、武士の家庭ではそういう習慣がなく、さすがに実行しかねた。結局はうまれたが、その始末として、

「いっそ寺へやってしまおう」

ということになった。

それを、十歳になる信さんがきいていて、「あのな、そら、いけんぞな」と、両親の前にやってきた。由来、伊予ことばというのは日本でもっとも悠長なことばであるとされている。

「あのな、お父さん。赤ン坊をお寺へやってはいやぞな。おっつけウチが勉強してな、お豆腐ほどお金をこしらえてあげるぞな」

ウチというのは上方では女兒が自分をいうときに使うのだが、松山へいくと武家の子でもウチ

であるらしい。

「お豆腐ほどのお金」

というたとえも、いかにも悠長な松山らしい。藩札はんきつを積みかさねて豆腐ほどのあつさにしたいと、松山のおとなどもはいう。それを信さんは耳にいれていたらしい。

旧幕時代、教育制度という点では、日本はあるいは世界的な水準であったかもしれない。藩によつては、他の文明国の水準をあるいは越えていたかもしれない。

伊予松山藩では、

「明教館」

という藩校がある。藩士の子弟はことごとくそこに入る。明教館には小学部が付属しており「養成舎」といった。普通、数え年八つになれば入学した。

信さんとよばれていた秋山好古も、八つでその学校に入った。

明治になり、その四年、松山にも小学校が設けられ、士族も町家の子弟もそこに入ったが、間ま尺やのわるいことに信さんはすでに十三歳であったために、齡としがどっちつかずであり、
「だから入らなかった」

と晩年語っている。入らないというのは年齢による理由だけでなく、維新後の士族の没落で家が貧窮をきわめていたからでもあった。

ひきつづき松山に中学が設けられた。

ここにも、信さんは入っていない。それどころか、信さんの毎日は労働者のそれであった。「銭湯の風呂焚きをして居なはった」

というのが、松山に残る口碑である。信さんはすでに十六になっている。色白で目がとびきり大きく、しかも鼻が隆すぎるという、いわば異相で、町のひとは、

——長崎の異人のような顔じゃ。

とうわさした。大きな目の目じりが、やや垂れて^たいるあたりが愛嬌^{あいきょう}になっていた。唇が娘のよう^うに赤く、そういう信さんが町家の町筋などを通ると、若い娘たちが声をひそめてうわさした。じつは、近所に銭湯ができた。戒田^{かいだ}さんという旧藩士が、自分の屋敷のむかいにそういう施設を建てたのである。

——士族が風呂屋になった。

というだけで、町中の評判になった。むろん、半分は悪評である。「士族のくせにひとの垢^{あか}と^り稼業^{かせよう}をすることがあるか」ということであつた。ところが、

「風呂屋はまだいい。秋山の坊ちゃんが風呂焚きになっている」

ということ、うわさをいっそうにぎわした。じつはこのことは信さんが頼みこんだ。

「よかろう。賃銭は、一日天保銭一枚じゃ」

と、戒田のオイサンがいった。やってみると、すさまじい労働だった。

まず燃料とりからはじめねばならない。お城下から東のほうに横谷という山がある。そこへ小^{あや}木^ぎをとりに行く。そのあと、井戸のつるべをいちいち繰^くって水くみをし、浴槽^{よくそう}にみたす。次い

で、焚く。

あとは、番台である。

「信さんは、やるのう」

と、戒田のオイサンは毎日ほめた。このオイサンは無類のおだて上手で、近所の子供をおだててはこき使うために評判がよくなり、とくにこの信さんの件については、

「信さんが可哀そうじゃ。わずか天保銭一枚であれほど働かされては、骨も磨り減るじゃろ」と、近所では罵つたり哀れんだりした。

秋山家の当主平五郎久敬ほど逸話のすくない人物もめずらしいであろう。

「あんなまじめな男もない」

というのが、若いころの評判であつた。早くから徒士目付という職をつとめ、篤実に勤務し、そのうち維新の瓦解がきた。士族の家禄が召しあげられ、その奉還金というのが千円足らずさがつた。その千円で他の士族は商売をしたりしたが、

「あいになにができるものか」

と、なにもしなかつた。そのほうがよかつたかもしれない。商売に手を出した者はほとんどが失敗し、元も子もなくなり、路頭に迷う者さえ出てきた。

平五郎久敬は、そういうなかで多少めぐまれていたのは、旧藩時代のまじめな勤務ぶりを買われ、県の学務課の小役人として採用されたことである。ただし薄給で、この子沢山の秋山家の家